

「密の味」

三枝樹 真

三密を避け今日も海に出る。

沖に向かう。誰もいない。

時々魚の大群が私に向かってソレ〜いくぞ！とばかり襲いかかってくる。

1匹、2匹、3匹〜〜〜30匹〜〜〜100〜〜〜201 ああ〜数えられない！助けてくれ！1000匹、2000匹。小さすぎる。速すぎる。一列に並んでゆっくり進め！小魚くん！私の叫びをあざ笑うように小魚の塊が、次から次へと突進してくる。

と、そのとき、顔面衝突寸前のタイミングで魚の大群は私の身体の下へもぐり込む。

その数はどんどん増え続け、私の右にひだりに流れて行く。

私の泳ぎに合わせるかのようにさっきの小魚の大群？今度は後方から前方に。

目が回る。小魚に襲われそう。

新鮮な小魚がいっぱいだ。

テレビで小魚の大群が大物の魚に襲われる。渦状の塊になりながら防御するも、次々に襲われる。

そんなシーンを先日テレビで見たばかりだ、今はその仕返しとして私が襲われる番のようだ。自然界ではのんびりしてはいられない。

突然どこかで退却の笛でも鳴ったのか？魚たち全員があっという間に立ち去った。来るのも早いが去るのも早い。

「お魚さん、君たちはこんなに密になって大丈夫ですか。」ちょっと心配。マスクは誰もしていなかった。ように思う。

7月は毎日雨と曇り。日焼けの心配をしていたが太陽が出てこないので安心。と、思っていたのに周りの人々から「顔が真っ黒」と言われ、心は真っ青。

8月の暑さは過去にない危険な暑さが続いていた。

日焼けを恐れ、太陽が沈む頃からが私の出番。毎日2キロを泳ぐ。日を追うごとに海水温は高くなる。お風呂に入っているようだ。

時にはクラゲの水槽の中を仲良く泳ぐ体験学習のように、海の中はクラゲだ

らけの日もある。「密はいけないよ」とどれだけいっても自然界は思いどおりにはいかない。気持ちが悪い。気分悪い！と思っていると2、3日過ぎて、突然どこかへ消えてしまう。

泳ぐ私に襲いかかる大波小波。それでも海を我がもの顔に泳ぐ私。大波を友として波と共にひたすら進む。

荒れ狂う大海を押さえ込むのはもう限界。しかし、「限界は乗り越えられる」と子供達に話していた頃の事を思い出す。

サバイバルというリュックを背負ってジャングルを旅した私にとって、この海は私の庭であり。私の海だから。今日も行く。

目に見えない新型コロナウイルスが猛威を振るうなか、三密が叫ばれ、他人との接触がはばかれてきた。

例年ゴールデンウィークには茅ヶ崎の浜辺に多くの人々が家族で楽しみ、若いカップルがまばゆい水着で日光浴。波打ち際はサーファーでごったがえす。

今年、ゴールデンウィークの海岸に人影が消えた。

浜にいる人々に密にならないように注意を促し、自粛求める様子がある。

黒沼知事が「今は湘南にはこないで下さい」とラジオなどで繰り返し訴えている。

事態は深刻になってきた。

海岸を走る人達もマスクを着用するに至って不気味ですらある。

そんな終末感漂う茅ヶ崎の海岸。人影の少なくなってきた遊歩道路と砂浜。

そんな砂浜にどこからともなくス〜と何かが現れたような気がした。砂浜から軽い足取りで一気に海に滑り込んだ黒い物体。

目の錯覚を感じさせる素早い動き。黒い獣。ゾワ〜と感じさせる獣。すべすべとした肌のなんといやらしい感じ。見ては行けないものを見てしまった息苦しさを。そんな邪悪な空気感が浜辺に漂う。

沖にむけて蠢く物体。みるみる遠ざかり大きなうねりの中に姿を消していった黒い物体。何てことだろう。新型コロナ騒ぎのこの時期に。

一この物体はなんだったのだろう。私にそっくりのシルエット。年齢を感じさせないすばやい動き。少し腰が痛そうなのは古傷があるのだろう。

髪の毛の艶やかさがそうとう減ってきている。前髪が上がってきているのを隠そ

ゴールデンウィークに入り気温は高くなってきたが、沖合の水温はまだまだ低い。30分以上泳いでいると冷えてくる。あああ～さむいと身体が叫ぶ。

人類はなす術を失うのだろうか。

一夜明け、狂乱のリング熱が少し落ち着いたところでお礼のメールを伝説の偉人「徳さん」に送信したお礼文が以下のもの。

一口カットしたリンゴ。一口頂いた直後から妻の叫びが聞こえて参りました。最高のおいしさ、食欲不振だったはずの妻。

たったひとくち食べただけで叫びにかわっていったのでしょう。

「リングスター」と申しましょうか。ビートルズ！といったところでしょうか！

やはりここにも「蜜」が隠されており、「密の味」すばらしいです。
昨今の流れを遺憾なく発揮した一品とお見受けいたしました。

ただ問題は、妻は「もうこれしか食べられない！」と宣言して「3食リング生活」に入った事です。

このまま食べ続けると明日の朝には-----ベッドの上でリングになっているのではないかと心配です。

きょうの夕食に私は柿を食べました。

以上が抜粋の文面です。

そして事件は起きました。次の日、朝の事です。11月も中頃を過ぎた日の事です。鳥のさえずりも聞こえてきます。晴れて良い一日になりそうな朝です。

きょうも海が私を呼んでいる。2キロの沖合コースをフルスピードで泳ぐ予定です。今年の11月はとりわけ水温が高く、泳ぐにはもってこいの快適さです。

今年は新型コロナの影響でランニングも、スイミング大会も一切中止です。密を避け、ひたすら泳ぐ密の味といったところです。

このようなひたすら泳ぐ至福の1年がこようとは思えない事態です。このあと何年も至福の日々が続くのだろうか？

考えただけでもああ～快感。

気づくと家の中に妻の姿がありません。

妻のベッドをふと覗くとそこに何か今までにない気配が感じられたのです。
ベッドの上に赤いリンゴが一個のっていました。
変身していたのです。

思い出した事があります。

6月のある日、伝説の偉人「徳さん」が我が家の庭先に現れました。突然です。

湯気がたっている焼きたてパン。今まさに焼き上がった一斤のパンをご持参頂いた。

これがとんでもないおいしいパンなのである。今までにこれほどおいしいパンを食べた事がない。劇的なうまさ。

麻薬でも混入されているのでは？と疑ったほど味わい深く、しっとりとして魅惑的なパンです。

このパンすごいです。

頂いたパン一斤を妻と二人で一気に食べ尽くし、このパンどうなっているのだろう？このうまさの秘密は？

そして私のパン作りの挑戦が始まったのです。

翌日朝の事です。妻の姿が見当たりません。家中探し回りましたが何処にも見当たりません。庭に出て花の手入れでもしているのかなと思い、庭に出てみたもののその気配はありません。不思議に思いながら部屋に戻り、ふと妻のベッドの上を見ると1斤のパンが置いてあったのです。

変身していたのです。

その後、伝説の偉人「徳さん」にパン焼きの秘密。『究極の[㊦]秘レシピ』をなにげに聞き出し、パン作りに挑戦するもその味がでない。伝説の偉人で師匠「徳さん」の「秘密はないですよ」と軽く言われる言葉のはしはしが私には秘密っぽく聞こえてならなかった。

やはり、そこには30年以上パン作りに情熱をかけて完成された苦心のパン。

偉人のその言葉には、達観した者のみが語る深くしっとりとしたパンへの思いが込められていた。

にわか仕込みの私にはもう無理。悲観にくれ床に頭を打ち付けるように身体を猫背して死んだ真似をしてみた。が、何の効果もなかった。

そんな私の苦しみを救うべく師匠は小麦粉の配合比率に加え、小麦粉現物までお持ち頂き「この配合で作れば同じものが出来ますよ」と差し出された。

ついに隠されていたボールが剥がされ、あの幻のパンが完成した。

涙が出るほど嬉しく、そしておいしい。このおいしさを知った私達。

この日を最後に、いつも行列のできている鉄砲道のパン屋さんに行くことは無くなった

そしてある日の朝、なにげなく妻のベッドの上を見ていると、パンくずが散らかっていました。

変身に失敗していたのです。

半年が過ぎ、今日も世界で3番目ぐらいにおいしいパンを私は作り続けている。

伝説の偉人「徳さん」のお住まいは我が家から泳いで5秒ぐらいで到着できる場所にあります。斜め向かいです。塀の上から飛び込めば2、3秒。道路があるので歩けばすぐです。

我が家で焼き上がったパンの匂いで「まだ、まだ、だな」とリビングで寛ぎながら、ほくそ笑んでおられるお姿が目につく。

「密生活」ではいろんな事がおきた。それでも生活の中心となっているのは泳ぎである

数年前までは、気持よく沖に向かってのんびり泳いでいるのに、砂浜では溺れている人がいると警察に通報する人がいた。ライフセーバーがぴったり接近し、通報があったので一応来てみましたとか。竿を片手に大きな魚が泳いでいるので来てみましたが泳がれているのですね。などなど親切な人が毎年現れたものだ。

「コロナ元年」の今年は違う、

遥か遠くから全速力で浜に到着すると拍手で迎えられる事数回。

「何処から泳いでこられたのですか?」「すごいですね!江ノ島からですか?」

「つかれないのですか?」「おいくつですか?」など、脅威のまなざしで毎回のお出迎えである。「74歳です」と答えると「ひえ～」と絶句する。

今度は「33歳です」と答えよう。それとも一気に86歳まで飛ぶか。

気づけば、大きなうねりが次から次へと沖から浜に向かって押し寄せる。その中を滑り込むように泳ぐ。サーファー達をさらりとかわし沖合へ向かう。

強風波浪警報が発令される日も、台風の接近で大荒れの日もなんのその。

今まで怖いなと思っていた事がいつのまにか消えていた。

大きなうねりの中を泳ぐ時、波のトップからボトムに向かって大きく腕を差し入れ水中に落下する。ボトムからトップに登ったところで反対の手を突き刺すように落下する。ああ～快感。

帰りは沖から陸に向かう波に身を任せ、押され押されて波に乗る。スピードが加速されその泳ぎの速い事。ああ～しびれる！

水の中は無重力、腕のかきが早まればスピードが上がり、もうどうにも止められない。1時間フルスピードで泳いで浜に着くも全く疲れない。

気づけば12月。ずいぶん遠くへ来たものだ。

この調子で泳げばハワイまで行くのも夢じゃない。

いくら自分の海とはいえ太平洋は広く大きい。

「三密コロナ」がしっかり長引かないとハワイ到着はむずかしい。

ハワイと湘南はつながっている。

それでも『密の味』は手に入れた。

2020年12月